

病室に元氣と希望運ぶ

疲れきった母親た

ちからは、「遊び相手

手がいるので安心して

てお風呂に入れました

た」「ひと思っけました」

なく、感謝のメールが届く。

「活動目を増やしてほしい」

と要望も多いが、交通費や

電話代で年間80万円かかっ

ており、これ以上、活動を

広げるのは難しい。

昨年、アメリ

リカ、カナダ両

国の子ども病

院を視察し、5

00人から1

000人単位のボランテ

ィアが子どもたちを支援

しているのを見て驚いた。

日本では、病児に付き添

う親の多くは孤軍奮闘して

いる。

入院児のQOL(生活の

質)向上と、安心して子ど

もを預けられる病院づくり

に、社会も関心を高めてほ

保育士の46人だ。

昨年1年間でボランテ

ィアが遊んだ子どもは、延べ

414人になる。75%が乳

幼児で、人工呼吸器を装着

している子や終末期の子ま

で、様々な状態の

子どもがいるが、

事故は起きていな

い。

遊びの効用に

は、予想を超えた

ものがある。口を

利かなかった中学生がボラ

ンティアにしゃべった、ぐ

ったりしていた子が起きて

遊び始めた、などのケース

もあった。

入院中の子どもと遊ぶボランティア

坂上和子さん

病院で子どもたちと遊ぶボランティアを始めて15年になる。ボランティアで活動しているのは、支援対象に広がりを持たせるためだ。東京・新宿区の「訪問保育士」として同様の活動をしていたこともあったが、区民以外の子どもにも支援ができないという限界があり、「ボランティアならできる」と考えたのだ。

活動拠点は国立国際医療センター(東京都新宿区)で、プレイルームにおもちゃや絵本を運んで遊び、個室訪問もしている。メンバーは、大学生、主婦、教員、

さかつえ・かずこ NPO法人「病気の子ども支援ネット

ト 遊びのボランティア」理事長。明治学院大卒。新宿区

の病院で保育士として訪問指導を行う一友、1999年に

病院で子どもと遊ぶボランティアを始める。共著に「病院

で子どもが輝いた日」(あけび書房)。52歳。

